

2019 年度グローバルウィーク Ⅰ の様子

ともしび
共生委員会ニュース

2019 年度　2 号

2019 年 7 月 2 0 日版

知ってほしい「山の手空襲」

１年に一度、原宿の「地域交流センター神宮前」にて、「山の手空襲を語り継ぐ集い」が行われます。今年は６月１６日（日）に行われ、生徒会長のSさん、副会長Kさん、放送部部長のHさんと部員３名、出版部部長のTさんと部員２名の計９名が参加し、司会や朗読、インタビューと大活躍しました。

この空襲は１９７５年５月25日深夜に実行された「東京空襲の総仕上げ」とも呼ばれる大空襲で、落とされた焼夷弾（固形化されたガソリンと爆薬を装填した、火災を起こさせるための爆弾）の量は、３月10日のいわゆる「東京大空襲」の約２倍・３２５８ｔに上ります。死者は３２４２名、私たちの通う青山学院の周辺も火の海になりました。

会では我々にもなじみ深い表参道や青山通り、明治通りも業火につつまれ、累々たる死体が周囲を埋めた事実が体験者の口から語られました。われわれは「共生」について考えるとき、現在、そして未来に目が向くことが多いです。空間的な視野を広げ、世界をまなざし、これからのことについて思いを致すのはもちろん大切なことですが、その現在がどのような過去によって成り立っているのかを知ることは同じくらい重要です。この取り組みは、体験者の方々が今を生きる我々のことを思って、身を切るような痛みに耐えながら行われているものです。この地に通う青山学院の生徒が、一人でも多くこのことに関心を持ってほしいと切に願います。

（平和共生委員会　吉成大輔）





「表参道が燃えた日」を語り継ぐ

HR302　S. M.

「表参道の大灯籠の傍らで彼女を待っている若者は、かつて灯籠の台石に焼死した人々の脂が黒く染み付いていたことを知らない。246 と表参道の交差点をのんびりと渡って行くカップルは、あの日その真ん中で座った姿のままで焼死した女性がいたのを知らない。地下鉄を降りて表参道ヒルズに急ぐ女性は、通り過ぎて行く伊藤病院の脇にあった防空壕の中であの日多くの人々が折り重なって死んで行ったことを知らない。」

これは今回私がとても衝撃を受けた言葉の一つです。私たちの想像する表参道とはかけ離れた過去を想像し、思わず怖くなったのを今でも覚えています。「山の手空襲って何？」と思っている人は、果たして高等部に何人いるのでしょうか。私もこの集いに参加するまではこの空襲の存在すら知りませんでした。しかし、学校代表として運営のお手伝いをさせていただきながら参加ができたこと、また、当時の様子や人々が思っていたことを経験者から直接聞くことができたことは、とても貴重で意味のある良い経験だった、と今は思います。

この空襲では東京大空襲の約二倍の焼夷弾がアメリカ軍から青山、表参道付近に落とされました。実際、当時この学校の生徒だった方も被害にあい、亡くなった方もいるということも伺いました。それは、この空襲を「他人事」にしてはいけないのだなと感じた瞬間でした。今、このような空襲や戦争について語ることのできる人は減ってきています。しかしこのような事実は忘れられてはいけないものです。なので、私たちは山の手空襲をもっと知り、後世に伝える語り部にならなくてはいけません。私たちは山の手空襲の当事者なのです。

また、今回この集いに参加することで、戦争について様々な角度からの意見を伺えたのも、とてもためになったと思います。日本史の授業で習ったようなことも、玉音放送を直接聞いた方からの言葉だと少し違う重みを感じました。「教育によって洗脳をされていたから負けるとは思っていなかったし、ポツダム宣言も受け入れられなかった。」このようなことを誰しも一度は聞いたことがあると思いますが、過去を思い出しながらそうおっしゃっている姿を見て、当たり前ですがこの表現は誇張表現ではなく、事実なのだなと痛感しました。また、憲法９条の改正反対のワッペンをつけている方もいらっしゃいました。「このような戦争を繰り返してはいけない」という強い思いがそのワッペンから伝わってきて、今まで憲法改正について他人事のように考えていた自分が恥ずかしくなりました。

山の手空襲を語り継ぐ集いを通じて、自分が戦争を他人事として捉えていたことに気付かされました。しかし、憲法改正に対しても、戦争の事実を語り継ぐのも、今後主体的に行っていかなければいけないのは私たちなのです。今回の集いの閉会の挨拶で「この会は『語る会』ではなく『語り継ぐ会』だから聞いて終わりではありません。」ということを聞きました。その通りだと思いました。特に山の手空襲に関しては先ほども述べたように青山学院の生徒が積極的に語り継いでいくべきだと思います。私も今回の経験をこれで終わらせず、責任を持って後世まで語り継ぐ、という義務を果たしたいと思います。

障がいあるなし関わらず、みんなで楽しく

HR301　T.H.

（本原稿は、Tさんがグローバルウィーク中の礼拝で奨励をした時のお話です。留学時に得難い経験をした生徒のメッセージをご覧ください。）

昨年私は、全米１住みたい街ポートランドがあるオレゴン州に留学しました。私がホームステイしたのはポートランドから車で３０分ほど離れた、ど田舎のフォレストグローブです。毎週日曜日一緒に住んでいた留学生と車の運転ができないため、大好きなスタバまで１時間ちょっと、こんな長い坂があるのにダイエットもかねて歩きました。雪の日もです。私が通った学校はど田舎にあるのに、２０００人以上もの生徒がいました。私は、アメリカの学校はハイスクールミュージカルのようにトロイやガブリエラのような人がいて親切にしてくれるんだろうなと思っていました。しかし、現実は違いました。

学校初日から現地の生徒と一緒に授業がスタートと、留学生扱いは一切なく、そして日本語を話せる人は一人もいませんでした。しかし、運良く 初日から友達もでき、すぐに学校に馴染めました。私の留学でのモットーは、日本でできないことにどんどん挑戦するということでした。例えば、ウェイトトレーニングのクラスをとったり、パジャマを着て映画館に行ったり 、ダンスパーティーにいくなど楽しいことを沢山しました。

しかし、一番挑戦してよかったなと思ったことはユニファイドスポーツに参加したことです。ある日、私は友達とこんな会話をしました。私は「一番好きな授業は何？」と聞き、「コミュニティークラスかな」と友人が答え、「何そのクラス？」と聞いたら「学校にいる障がい者の生徒と一緒に買い物に行ったり、料理をしたり、ゲームをして彼らとどのようにしてコミュニケーションを取るかを学ぶの」と教えてくれました。私は今まで学校で障がい者と友達になる機会がありませんでした。私の母は、近所の学校で障がい者のお手伝いをしていたことがあったので、私は、決して偏見がある環境で育ったわけではありませんでした。しかし、彼らを見かけると、見て見ぬ振りをして、ウーと声を出している彼らを見たら違う場所に行ったりしていました。そのため私は友達からそのクラスのことを聞いた時に 、彼らのことを知りたいと思いました。

その時私はこのクラスを取ることができなかったので、友人にユニファイドスポーツに誘われたのでユニファイドスポーツのバスケのチームに入ることにしました。ユニファイドスポーツとは障がい者と一緒にスポーツをするスポーツです。私の学校にはスライドにもありますが、障がい者と交流することができる機会が多くありました。私は、バスケの練習に行く前に正直サポートだけで、柔らかいボールで遊ぶだけだろうと思っていました。しかし、私が想像していたこととは違い、ほとんどの子がドリブルして走って、頑張ってシュートをして、本格的なバスケでした。私たち健常者は運動が得意ではない子のサポート役ではありましたが、普通に体育の授業のようにドリブルをしてシュートもできました。シュートが入ったら互いに喜んで、入らなかったら応援しあい、障害あるなし関わらずみんなで仲良くなることができました。

このクラブに入って一番嬉しかったことは、普段うまく話すことができず、少しの単語しか言えないジョーイという男の子がシーズンの終盤に私の名前を覚えて、呼んでくれたことです。その後も私は彼らともっとコミュニケーションをうまくとりたいと思い、最初友人が教えてくれた授業を選択しました。クラス内で先生が障がい者と健常者のペアを作り、ペア同士で助けあうというシステムでした。私はマーカスという子がペアでした。彼は歩くのも遅く、話すことがうまくできず、ウーーと声を出すのとサンキューなど少しのことしか言えず、コミュニケーションを取るのが難しかったのですが、学期最後には、ハイタッチをしあえる仲になれました。最初の頃はとは違い、学年最後には廊下であうと私の名前を叫んで彼らがきてハグをしたり、カフェテリアで見かけたら私は、私の友達を連れて障がい者の生徒たちが食事をしているテーブルに行ってみんなと話したりと本当に仲良くなれました。

ある一人のダウン症の女の子が私の誕生日に私の誕生日だと知り、字を書くのが得意ではないのに、紙を切って、そこにラブフレンドと書いて私にくれました。私は、嬉しく今でも大切に保管しています。私はアメリカでこのような経験をし、彼らと友達になり、彼らは努力家であり、優しい心の持ち主だと思いました。そして彼らは、障がいではなく、時間が私たちより必要なだけで、私たちと同じ価値のある存在であると思いました。

今、グローバルな社会と言われて、肌の色や国籍問わず、社会の中で人々が混ざり合って、互いを受け入れ合っています。しかし、障がい者のことは受け入れられているでしょうか？私たちは、彼らを社会の隅に置いてはいませんか？彼らは自分たちよりもできないと思い、見下してはいませんか？ 何千年も前に、イエス様は会堂の隅にいた手の萎えた人、障がい者に、真ん中に立ちなさいとおっしゃいました。当然、その時代は今よりも障がい者に対する偏見がすごかったでしょう。しかし、イエス様は周りの目を気にせず、その当時に人権もなかったような人でも見捨てず、救おうとしました。私たちもイエス様のように周りに流されず、正しいことを隣人に行うべきではないでしょうか？私たちから、ユニファイドスポーツなどを通して彼らに歩み寄って、私たちで彼らにとっても住みやすい社会を作れたらいいなと思っています。



